

和田先生への謝意をこめて

商学部企業法学科 教授 石 黒 匡 人

和田先生に初めてお会いしたのは、私が大学院に入学して北大公法研究会に所属するようになった1981（昭和56）年のことでした。その後本学に赴任することになり、小樽での生活に関して、そしてまた大学での仕事面でも、いろいろお気遣いいただき、多くのことを教えていただきました。

大学院と研究会の後輩としてお世話になり始めて以来ほぼ40年、1994（平成6）年に後輩同僚となってからも四半世紀以上経ってしまったのだと、今更ながら感慨深いものがあります。

振り返ってみますと、学科におられたころの先生は、企業法学科を愛し、その発展に心を砕かれておられたという印象が残っています。学科の研究拠点とすべく法制研究会を立ち上げられたことはその一つだと思います。さらにその後、これを学科全体で大学院教育に当たる場にもすべく、授業科目に組み入れられました。それは、大学院生が多様化する中で、院生が学び交流する場が十分とはいえないのではないかと懸念されていたためでもありました。

その後早くから大学運営の中核に移られ、今や学長副学長としての和田先生しか知らない教員が大半というほど、先生が学科を離れられてから長い期間が過ぎました。これは企業法学科にとっても非常に大きな痛手でしたが、ご自身はお忙しく大変な毎日を過ごされたことと思います。しかしそのような中でも、籍は離れてもずっとメンバーの一人だとのお気持ちで、歓送迎会ほか学科の行事に参加し、また様々な問題に関して相談にのって多くの知恵と力をお貸しくださいました。これは、本当にありがたいことでした。

大学運営において多くの成果を残されたことは、商学討究71巻2・3号での

穴沢学長による紹介のとおりで、そこで大なるリーダーシップを発揮されたわけですが、先生は同時に常に教授会を大事にされていたと感じます。学科運営においても同じであったと思いますが、国立大学法人化後も、民主的な大学といういわば理想を常に忘れずに、構成員の意見を大事にしながらかじ取りをされてこられたのではないのでしょうか。実力とともに先生のそのお人柄が、多くの教職員の信頼を集めることになったものと思っています。

20年近く前、先生の下に集まった若手教員たちにより、高大連携、高大接続、初年次教育、導入教育、等々の先駆的な取り組みが実現されていき、和田シュレならぬ「チーム和田」と呼ばれていたことも思い出されます。

まさに名学長の先生ですが、学生部長副学長いずれの時も就任受諾の弁で、「教授会のご意志ですので」とおっしゃられたと記憶しています。それがなぜか心に残っています。先生は本当は研究に浸る生活を送られたかったのではないのでしょうか。先生の理想とされた学究の道を犠牲にして、長きにわたり執行部の中核でご苦労され、大学運営の責任を負い続けてくださったように感じています。先生の商大愛には感謝してもしきれません。そして新型コロナの状況から、学長退任パーティーも開かれないうちであることは、本当に残念で申し訳ない気持ちです。

その意味でも、名誉教授記念号に先生の指導を受けた研究者を含む経済法研究会の先生方によるこの臨時号が加えられたことは、個人的に大変嬉しく思うとともに、先生にもお喜びいただけることを願っております。

そして、この臨時号実現にあたってご配慮いただいた江頭副学長に感謝するとともに、ご寄稿いただきました先生方、そしてとりわけご尽力賜りました稗貫俊文先生に、お礼申します。

ところで和田先生は、水泳、ランニングと大変なスポーツマンで、おたる運河ロードレースでは「日本最速の学長」と呼ばれてもいました。

また独身時代には、大学院の仲間と山登りをされたり、他方官舎の庭で畑をなさって、野菜を周りにお裾分けされていたこともあると伺いました。

ようやく激務から解放された今、少しゆっくりといろいろ趣味を楽しんでり

フレッシュされ、これからもお元気で、私たちをお導きくださるようお願いいたします。

先生、長い間本当にお疲れ様でした。そしてありがとうございました。